

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 30 年 7 月 7 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程(5年一貫制)学生
氏名	大塚亮真
1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園におけるマウンテンゴリラの住民参加型保全とエコツーリズムの持続可能性に関する研究	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 30 年 5 月 13 日 ~ 平成 30 年 6 月 25 日 (44 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
Conservation Through Public Health, Dr. Gladys Kalema-Zikusoka	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)	
<input type="checkbox"/> 今回の渡航の目的 2018 年 5 月 13 日から 6 月 25 日までの期間、ウガンダ共和国ブウィンディ原生国立公園において、フィールド調査を実施した。今回の渡航の目的は、博士論文執筆のためのデータ収集(おもにストレスホルモン研究のためのゴリラの糞サンプル採取)に加えて、目まぐるしく変動する現場の状況を確認し、博士課程の研究を円滑に効果的に進めるために、UWA (Uganda Wildlife Authority) や UNCST (Uganda National Council for Science and Technology)、そして CTPH と議論を重ねることであった。	
<input type="checkbox"/> 調査の日程 5 月 13 日~14 日: 京都→関西国際空港→ドバイ空港→エンテベ空港→カンパラ 5 月 15 日: カンパラで UWA と UNCST を訪問 5 月 16 日: カンパラからブウィンディ原生国立公園へ移動 5 月 17 日~6 月 22 日: ブウィンディ原生国立公園にて調査 6 月 23 日: ブウィンディ原生国立公園からカンパラへ移動 6 月 24 日~6 月 25 日: カンパラ→エンテベ CTPH 訪問→エンテベ空港→ドバイ空港→関西国際空港→京都	
<input type="checkbox"/> 調査の実施状況と成果 1. ゴリラの追い返しを担う地元ボランティアグループ HUGO のフォローアップ調査 修士課程の研究で着目した、畑荒らしにやってくるゴリラを森へ追い返す地元のボランティアグループ、HUGO (Human-Gorilla Conflict Resolution Program/Team)メンバーを訪問し、現在の活動状況について聞き取り調査を実施した。それに加えて、当時の状況をよく知る NGO 関係者らに聞き取りを実施した。HUGO の設立当時の会議資料やレポートを入手できないかどうか、現在も交渉中である。	
2. ウガンダの国立公園におけるドローンの使用について まず、ドローンはエンテベ空港の税関にて没収されてしまい、ウガンダ国内に持ち込むことはできなかった。その後 UWA や UNCST と相談して、ドローンを使用するために必要な手続きを確認した。帰国時にエンテベ空港でドローンを回収した。今後は得られた情報をもとに、ドローンの使用について慎重に検討していきたい。	
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: <a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a>	

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

### 3. マウンテンゴリラのストレスホルモン研究

ブウィンディ原生国立公園に滞在した36日間のうち30日間、7:00~16:00ころまでゴリラを追跡しネストとトレイルから糞サンプルを非侵略的な方法で採取した。採取したサンプル数は合計169サンプルで、実験によって得られたサンプルも合計すると260サンプルを得ることができた。対象とした群れは2群あり、サンプルを継続的に採取できた個体数は全部で17個体である。採取後すぐにサンプルをアイスボックスに入れてキャンプに持ち帰るまで低温に保った。採取後5-10時間以内にCTPHのラボにて1.0gの糞を8.0mlの90%エタノール入りの25mlチューブに入れて抽出した。抽出後40分間静置したのち上澄みを0.8mlとり2.0mlチューブに移した。1日に各群を訪れた観光客数、1時間ごとの気温と湿度、群間でのインターアクションなどゴリラのストレスレベルに影響を与えうるデータも収集した。事前に計画していたフィールド実験においても必要サンプル数の半分以上をカバーすることができた。

なお、UWAとMTA(Material Transfer Agreement)を締結し、UNCSTから発行された輸出許可証をもって正式にサンプルを日本へ持ち帰った。7月の1週目にWRC(京都大学野生動物研究センター)にて木下こづえ博士の指導のもとEIAを用いて糞中糖質コルチコイド代謝物濃度の測定をすでに実施した。今後は、主にGLMMを用いて、糞中糖質コルチコイド代謝物濃度(応答変数)と観光客数、平均気温、湿度、季節、子殺しなどのその他のイベント(応答変数)との関係を分析する。

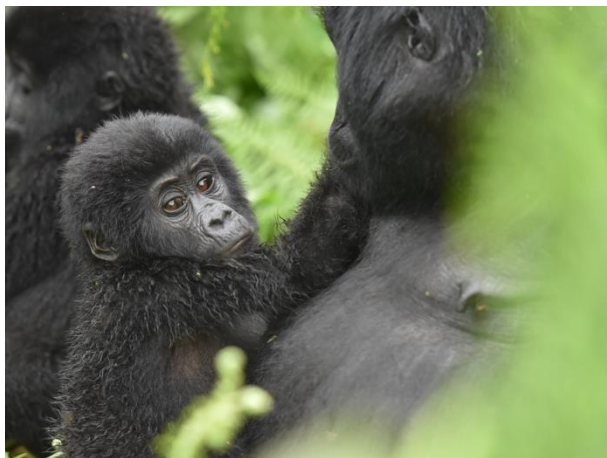


写真1. 授乳後の母親と子供



写真2. すっと起き上がった後のオトナメス



写真3. 遠くをみつめるオトナメス



写真4. 母親の新鮮糞を食べる子供

### 6. その他 (特記事項など)

本フィールド調査はPWSの支援のもと実施することができました。研究受入機関であるCTPH(Conservation Through Public Health)、そして調査許可と糞サンプルの輸出許可を与えてくださったUWA(Uganda Wildlife Authority)、UNCST(Uganda National Council for Science and Technology)に心より感謝申し上げます。